

ハイデガー・フォーラム第19回大会

発表要旨1

(統一テーマ：歴史)

贈り定めとしての存在の歴史とは何か

存在の歴史。ハイデガー哲学を学んでいるひとからすると馴染みのある言葉だが、そうでないひとからすると異様に見える言葉であろう。存在とは基本的には彼岸に有るもの、時間的な影響を受けない永遠なるもの、神的な次元に属するものとして考えられているだろう。そのため歴史といった移ろいゆく時間的なものとは本来そぐわないもののように見える。しかしハイデガーは存在の歴史という。存在に歴史を認めることとなる。しかしそれはいったいどのような事態を指すのだろうか。

ハイデガーは上記のような図式そのものを、もしくはその図式の由来こそを問う。このような存在を「現前性 (Anwesenheit)」として考える形而上学的な思考法から、歴史(運動)を開放することが『存在と時間』の重要な課題の一つであった。現前としての存在、そしてこの存在から理解された時間、それらよりも根源的な存在と時間へと遡行することが、ハイデガーにとって重要な問題であった。この発表ではこのような次元において、存在と歴史がどのように考えられるのかを解明するようにしたい。

しかし問いが巨大であるため、的を絞るようにしたい。一見すると先の問いと離れるようだが、「裂け目 (Riss)」と「言葉 (Sprache)」に注目してみたい。

ハイデガーは歴史を出来事として、ある種の突発時として考えている。それは何か新しく始まることであり、従来のものからすると裂け目が入られるような事態を意味する。この裂け目から、新しい何かは到来することとなる。もしなにかしらの必然性があらかじめ存在しており、そこから世界と歴史が生じるのであれば、ほんとうの意味での世界と歴史はない。そこでは人間はあくまで傀儡に過ぎない。それらはただの仮象であるに過ぎないであろう。しかしハイデガーはこのように存在を理解をしない。裂け目(深淵)から始まりが贈り定められると考えるのである。しかしこの裂け目はあくまでそれを覗き見る、もしくはそこへと至るような人間抜きには存在しない。もしくはそれをあらためて開示し、名前をつけるような人間抜きには存在しない。ハイデガーは未だ名前を持たない謎の次元を裂け目として考えるのである。始まりにおいて何かは裂ける。この裂け目を中心に存在の歴史は動くこととなる。裂け目が由来であり将来として考えられており、これを中心に歴史は回る。

この裂け目から言葉がもたらされる。ハイデガーの言語理解はかなり独特であるのだ

が、さしあたり言葉は道であり、至らしめるもの、運ぶものとして考えられている。それは我々を存在へと運び入れるようなものであり、また存在を我々へと運び込むものである。このような言葉が我々を裂け目である深淵へと手招きする。ハイデガーは運命について語るのだが、言葉は我々を拉し去るような運命として考えられており、それは裂け目からとどろき、裂け目へと至るよう促す。そしてこの裂け目は、人間がそこへと至ることを通じて、それに名前が与えられるようなものなのである。言葉は道であり、しかもその道をたどることを通じてのみ、目的地が明るみになるような道である。存在の歴史とはこのような道として考えられる。

存在の歴史は運命であり贈り定めである。しかしそれは極めて激しい痛みを伴った命がけの跳躍の中で輝くのであり、そこには人間の何かしらの働きかけが必要である。あらかじめ一つの必然が支配しているのではなく、その必然性そのものをあらためて作り出すような人間の働きかけが存在の歴史の真理を形作る。そしてこのような存在の真理を全うさせるものとして、人間もまたその存在を得る。後期ハイデガーは思索と詩作を考え抜くのだが、このような人間と存在の映しあう関係が考えられているはずである。

極めて理解が困難な次元であるが、この次元について少しでも光を当てるようにしたい。そのため発表それ自体がある運動をもたらす必要がある。そのさい裂け目を与えて、新たな言葉を送り届けて、そこへと至らしめることが求められる。ハイデガーは解明を場所を究明することであるというが、それは事柄がそこから生じる裂け目へと至らしめることであり、そこへと至らしめる通路を作り出すことであるはずだ。及ばずながら、このような出来事を反復すること、それをあらしめることこそを課題としたい。そのためにも裂け目と言葉を考えることを通じて、そうするようになりたい。

ハイデガー・フォーラム第19回大会

発表要旨2

(統一テーマ：歴史)

選択の原理の問題とハイデガーの歴史性概念

歴史家が無数の出来事のなかから重要なものとそうでないものとを区別する基準は何か。ハイデガーは「歴史科学における時間概念」(1916)で、歴史家の関心をひくものとは「影響のある(wirksam)」ものであり、「選択は、現在がある何らかの影響(Wirkung)や発展の結果に即してもつ歴史的関心にもとづいている」という歴史家エドゥアルト・マイヤーの説を取り上げ、リッカートと同様に、マイヤーの説を「価値関係」という概念を用いて補足している。「関心」というものはいつでも一つの観点から規定されていなければならない、規範によって導かれていなければならない。選択することは価値関係にもとづいており、歴史科学の目標とは、影響や発展の連関を文化価値との関係によって一回性において叙述することである。

しかしまた歴史科学にはその対象に関してもう一つの本質的な特徴がある。つまり、対象は過ぎ去り現実存在しておらず、過去は現在から見られることによってのみ意味をもつ。対象と歴史家との間には時間的隔りがあるのであり、過去への通路を可能にするのは、叙述されるべき出来事の実事性の確保(史料)と史料の事象的内実の正しい解釈である。ハイデガーは、歴史科学における時間概念は自然科学とは異なる質的な性格を有していることに言及し、「いつ」を問う仕方に歴史的な時間概念の原理として価値関係が関わっていることを指摘するのである。

その後も1919年の講義「現象学と超越論的価値哲学」で、リッカートの価値関係は、歴史家が歴史的に本質的なことと非本質的なこととを区別する原理として取り上げられているが、もはや支持されていない。1920/21年講義「宗教現象学入門」では、「歴史的なもの」に対する立場が三つに分けられ、ディルタイ『精神科学序説』、ジンメル『歴史哲学の諸問題』、ヴィンデルバント-リッカートの歴史哲学が、プラトニックな第一の立場とシュペングラーに代表される第二の立場の妥協的立場として第三のグループにまとめられている。この講義でハイデガーは、ジンメルのいう「歴史的関心」をマイヤーの「影響あるもの」といった規定との関わりから説明し、そして第三の立場を「現在」を「過去」に対して明確に境界づける立場として特徴づけるのである。

こうした問題意識が『存在と時間』の「歴史性」の問題につながっていることは確かであろう。ハイデガーによれば、「歴史的把握の「認識論的」(ジンメル)明瞭化」や「歴

史叙述の概念形成の論理学（リッカート）」という問題設定においては、また歴史学の対象面に定位している場合においても、歴史は一つの学の客観としてのみ近づきうるにすぎないのであり、いかにして歴史が歴史学の可能的な対象となりうるかということは歴史性からだけ見て取れる。「対象面」に定位した立場に関して『存在と時間』では言及されていないが、ディルタイを挙げることができる。ディルタイによれば、歴史家は「作用連関（Wirkungszusammenhang）」から対象を選ばなければならないだけでなく、対象そのもののうちを選択の原理が含まれている。そして、ディルタイもまたマイヤーに言及して、作用連関のなかでの位置をマイヤーのように「現在」によって考えるならば、「現在」のなかで何を重要と見なすかを規定する基準をもたなければならないというのである。

『存在と時間』では「作用連関」という用語は、ディルタイの立場を説明する箇所以外には、通常の「歴史」という語がもつ四つの意味を取り上げている箇所が使われている。ハイデガーは、（１）「現在」との影響関係、（２）「過去」「現在」「未来」を貫く出来事の連関または「作用連関」、（３）人間や「文化」の変転や運命、（４）伝承、といった通常の歴史理解の分析から「歴史性」を引き出し、歴史学の主題は一回的なものでも普遍的なものでもなく、「事実に実存にもとづいて既在した可能性」であるという。ハイデガーは、歴史学にとって対象となるべきものの選択は、現存在の事実に実存的な選択のうちですで行われており、史料だけしか刊行しないような歴史家の実存が本来的な歴史性によって規定されていることもありうると思うのである。

選択の原理の問題をハイデガーの歴史性概念との関連から扱う場合、因果分析といった歴史学にとって重要な要素は抜け落ちてしまうことになる。しかし、歴史学の選択の原理をめぐる議論の文脈に歴史性概念を位置づけるならば、歴史学が対象とする「歴史」と哲学が問う「歴史」との関係がより明確になると思われる。本発表では、主にリッカートの「価値関係」およびディルタイの「作用連関」に注目してハイデガーの歴史性概念を考察する。

ハイデガー・フォーラム第19回大会

発表要旨3

(特集：東アジアの思索)

沈黙としての対話 ——『言葉についての対話』から間文化哲学へ

対話篇『言葉についての対話』(1953/54)においてハイデガーは、かつて彼のもとで学んだ九鬼周造の「いき」を話題にしたうえで、ヨーロッパ的な思考と東アジア的な思考の相容れなさを指摘しつつ、日本人に向けて、なぜ日本に根差したものを語るのに「概念」が必要なのかという問いを投げかけた。多くの日本の哲学者に多大な影響を与えたドイツの哲学者によって呈示されたこの問いは、西洋中心的な哲学観への反省と共に多元的な文化へと開かれた哲学観への転換が呼びかけられる現代において、日本人のみならず全ての哲学する者にとってますます差し迫ったものになってきている。

ハイデガーもまた、自らの存在の思索のよりどころを、そして哲学の起源を古代ギリシアに見出していることからして、西洋中心的な哲学観に基づいているようにみえる。たとえ彼が西洋形而上学との対決を通じたいわゆる「別の始原」への移行を唱道していたにせよ、それはあくまで彼の存在史的思索に基づいた西洋形而上学の始原への遡求と不可分である以上、彼の哲学は伝統的な西洋哲学の文脈に根差していることは疑いようもない。この観点からみれば、先のハイデガーの問いは、西洋中心的な哲学観に基づいたうえで、西洋の外に哲学はそもそも可能なのかという素朴な疑義を突きつけるものでしかないだろう。

しかし他方で、ハイデガー自身が東アジアとの対話が不可避であると認めていたことも事実である。このことに鑑みれば、件の対話篇はハイデガーによる東アジアの思索との対話の試みの現場に他ならないであろう。この意味でこの対話篇は、異文化間の哲学の対話によって西洋中心的な哲学観を再検討する「間文化哲学 *Interkulturelle Philosophie*」の先駆とみなしうる。しかし、この対話篇がドイツ文学者である手塚富雄との実際の対話をきっかけにしたものであるにせよ、ほとんどがハイデガーによる創作であり、その内容も彼自身の思索に牽強付会に引き寄せられたものであるかぎり、それは森一郎が指摘するように「疑似対話」に陥っているといえる。

したがって本発表では、この対話篇を間文化哲学の視野から再検討し、ハイデガー哲学の内部に真に「間文化的な対話」の可能性を見出すことを試みる。この際に留意したいのは、対話篇のなかの「問う人」であるハイデガーが、自らの思索において「間文化

的な対話」による東アジア的な思索との出会いを必要としたということのみならず、「日本人」もまたヨーロッパ的な思索に基づく「概念」を必要としたということである。つまり真に「間文化的な対話」を考えるには、単に西洋中心的な哲学観からの脱却を試みるという西洋から非西洋への方向のみならず、非西洋から西洋への方向をも考慮しなければならないであろう。なぜハイデガーにとって東アジアの思索との対話が不可避であるかを問うと同時に、われわれがなぜ哲学を必要とするのかを問う必要がある。さもなければ間文化哲学は、「哲学」のために非西洋的なものを消費するオリエンタリズムに陥る危険を免れえないであろう。

こうした対話が孕む「危険」は、まさにハイデガーが『言葉についての対話』において指摘したのものである。この危険は、彼が「存在の家」と名指すわれわれの言葉に根差しているものであるが、対話の孕む危険は異なる「存在の家」と出会うとき、すなわち「間文化的な対話」において際立つ。ハイデガーによれば、「存在の家」の違いは単なる言語の違いではなく、言葉を通じた存在との関わり方の違いである。「間文化的な対話」においてわれわれは、常に自らの「存在の家」から出発して対話せざるを得ないがゆえに、自らの「存在の家」の枠組みで異なる「存在の家」を理解してしまう危険と隣り合わせなのである。

ハイデガーが指摘する対話の「危険」は、彼自身が対話篇のなかで避けがたく陥らざるを得ないものであったであろう。では、異なる「存在の家」の間には断絶のみがあり、それらを架橋する「間文化的な対話」はそもそも不可能なのであるか。ハイデガーは、対話の孕む「危険」を指摘する一方で、対話篇の最終局面では、ふさわしい対話のあり方が「語り」であるよりむしろ「沈黙」であることを示唆している。「沈黙」とは、ハイデガーが言葉の本質的なあり方として規定するものである。本発表では、この「沈黙」としての対話を出発点にして、間文化哲学へと接続することにより、ハイデガー哲学のなかにある「間文化的な対話」の萌芽を、真に「間文化的な対話」へと結実させることを試みたい。この際に論点となるのは、「沈黙」としての対話という発想の内実と「存在の家」の複数性との関係である。ここに焦点を当てることにより、ハイデガーにおける「沈黙」としての対話という発想を、文化の複数性と「間文化的な対話」がどのように成り立つのかという間文化哲学における問題へと接続することができるはずである。

ハイデガー・フォーラム第19回大会

発表要旨4

(自由テーマ)

『存在と時間』の学問的研究と存在論的尋求

『存在と時間』が20世紀の哲学書で最も多く研究されているものの一つであることは間違いなく、古典と言われてよいであろう。古典であるということは著者の意図や主張から独立し、様々な問題の関連で考察されて当然であるということができる。他方、『存在と時間』を理解する点で、そこで論じられている問題に関して言えば、特に注意すべき問題が提出されていると言える。それは古代ギリシアから近世にいたる西洋哲学の歴史を通して存在の問いが忘却されているという指摘であり、それ故に改めて存在の問いを具体的に詳論することが求められるのである。

この問題との関連で、存在を究明し論述するための語彙が不足しており、更にその文法が欠けていることが述べられている。しかし同時に、その論述で用いられる語の意味理解に必要な条件も述べられている。それは存在の問いを自己の実存的な可能性としてつかみ取るという制約であり、それなしには実存規定としての語はその意味を示さないとされるのである。

それだけではない。『存在と時間』が二部から構成されるとされたのは存在の問いが二つの課題に分枝することに基づいているのである。それは存在の問いが諸学問の可能性のア・プリオリな制約に向けてと共に存在論の可能性の制約に向けられているということに基づくからである。

ハイデッガーがナトルブによる現象学の記述に対する批判を取り上げている1919年戦時緊急学期の講義に於ては、現象学の学問性の厳密さは派生的な諸学問のそれとは比較にならないと言われている。そして1927年の講演「現象学と神学」では、諸学問と存在論の間には絶対的な違いがあるとまで述べられている。更にこの講演では哲学が哲学であるための制約が述べられているということも重要である。その要点だけを言えば、神学以外の諸学問に対して哲学はそれ自身の本質に基づいて指導(Direktion)を為すという課題を有しているというのである。

ところで、絶対的に違う関係にあるとされる存在論と諸学問の間で、一方が他方に指導という働きを行うということは普通考えるとあり得ないことである。この点で、『存在と時間』が現象学の記述を徹底して遂行しているという点の理解が不可欠となると考えよう。まず第一に、学問は現存在の存在様式として規定されている。第二にプラトン・

アリストテレスの活動に言及しつつ、産出的論理学が一定の存在領分に先立って飛び込み、実定的諸学問がその探求をなし得るようにすることが述べられている。それは哲学が諸学問と無関係にその働きを行っているのではないことを明らかにしている。第三に現象学の規定がなされるところで、現象学の学、ロゴスがアポパイネスタイという中動相として捉えなおされ、更に「共に語り合う者にも」現象そのものがそれ自身を示すということが述べられている。こうしたことを確認したうえで、存在論と諸学問の可能な関係を考えるとどうなるであろうか。存在論にとって他者となる諸学問は顧慮という存在様式で出会われていることになる。そして顧慮についての分析に於て、ハイデッガーが二つの極端な様式を述べていることはよく知られている。一つは他者の関心をいわば奪い取り、配慮に関して他者にとって代わり、他者の身代わりとして支配するような顧慮であり、他方は他者に対して先んじて飛び込むことで、他者にその関心をそのものとして与え返すような、そして産出的論理学がそうであったように先んじて飛び込み解放する顧慮と述べられている。この後者の場合、解放となるかどうかはどこまでも他者つまり諸学問の側の問題であって、存在論がそのことのために何らかの行為を付加的に行うのではないのである。

更に諸学問と存在論との絶対的な違いが無関係と同じでないという点も考える必要がある。『存在と時間』が書かれた同時代の諸学問の状況を述べる箇所で「学問の本来の動き」が諸学問の基礎の危機に即して捉えられている。ハイデッガーはその事態を諸学問が哲学的傾向を持つこととも述べている。これは言葉の上での問題でなく、記述されている事象そのものの理解の問題である。諸学問の基礎の危機は丁度産出的論理学が諸学問に対する関わり方と同じであるということが出来るであろう。

この問題を考えるうえで企投の非性の理解が重要である。現存在の自由は一つの可能性を選択すること、即ち他の可能性を選び得ないことにあるという有限性である。このことが取り上げられている繋がりから、存在の問いを問うことにおける企投の選びが問題となっていると言える。存在の問いを問い直そうとする『存在と時間』を理解するうえで、学問に対する批判を避け、学問的な解明を選択するとしたら、少なくとも存在の問い求め、尋求に近づくことは不可能だということを、この分析から理解することが出来るであろう。